

## パウロの喜び (3)

2008. 02. 05 (火)

ベック兄メッセージ (メモ)

引用聖句

哀歌 3章22節から26節

私たちが滅びうせなかったのは、主の恵みによる。主のあわれみは尽きないからだ。それは朝ごとに新しい。「あなたの真実が力強い。主こそ、私の受ける分です。」と私のたましいは言う。それゆえ、私は主を待ち望む。主はいつくしみ深い。主を待ち望む者、主を求めるたましいに。主の救いを黙って待つのは良い。

日曜日、ある兄弟から送られて来たEメールを読みました。それをもう一度紹介いたします。信じる者にとって、非常に大切な内容だと思います。題名は、『考えなさい』ということでしょう。

- ・私たちがもし、昨日主に感謝するために時間をつくらなかったことから、主が、今日私たちに祝福するために時間をおとりになれないということになったら、どうなるでしょう。
- ・私たちが今日主に従順に従わなかったので、主は、明日私たちに導こうとなさなければ、いったいどういうことになるでしょう。
- ・私たちが今日「みことば」を読まなかったので、主が、明日私たちの聖書を取り上げようと思われたとしたら、どうでしょう。
- ・私たちが「みことばを伝える人」の話に耳を貸さないため、主が、私たちに語ることをおやめになったとしたら、いったいどうなるのでしょうか。
- ・私たちが隣人のために心配し、愛すると同じように、主が、私たちがいつも配慮してくださり、また私たちが愛し、心配してくださらないとしたら、どうでしょうか。
- ・私たちが全てを主にささげようとしなかったので、主が、今から私たちの叫びに聞く耳を持つとされなければ、それこそ悲劇そのものになるでしょう。
- ・私たちが主を第一にしなかったので、主が、私たちの必要に対して知らん顔をなさったとするなら、いったいどういうことになるでしょう。

答えは、はっきりしています。「絶望」です。ですから、兄弟から送られて来たメールの内容は本当に大切なことなのです。

哀歌 3章22節

私たちが滅びうせなかったのは、主の恵みによる。主のあわれみは尽きないからだ。

主は、私たちと全く違うお方であるので感謝なことです。

イザヤは書いたのです。

イザヤ書 42章3節

彼はいたんだ筆を折ることもなく、くすぶる燈心を消すこともなく、まことをもって公義をもたらす。

さて今日も続いて、テサロニケ第一の手紙について、少し考えたいと思います。

先週一緒に学びましたように、第一章においては、「生き生きとした教会」について読み深めてきました。「死んでいる教会」もあり得るということです。昔、I姉妹は、お母様と一緒に二つの教会へ行ったらしいのです。一つは立派な教会。他はまあおそらく家庭集会のようなものだったでしょう。そして小さなIちゃんは、「ママ、あの小ちゃい所へ行きましょう。あの大きな教会に行きたくない。イエス様のいない教会だよ」と言ったそうです。

つまり「死んだ教会」もあり得るということです。テサロニケの教会は、「生き生きとした教会」でした。そして、「生き生きとした証し」をしている時に、その教会は本当の意味で「生き生きとしている」ことがわかります。

おそらく一月の間、パウロはあの町で、十字架につけられたイエス様、復活なさったイエス様、また近いうちに来られるイエス様を証ししたと思います。そして結果として、多くの人々が導かれ、救われました。彼らは新しい人間になっただけではなく、お互いに結びついて一つのものになりました。今までは全く無関係で、いろいろな意味においてバラバラだった見ず知らずの人たちが、心を一つにして一堂に会するようになりました。ユダヤ人も異邦人も、内住の聖霊によって一つのものになったのです。

「生き生きとした教会」は、まさに生きるまことの神の奇跡のみわざそのものであり、聖霊の働きによって生まれたものです。本当に「生き生きとした教会」とは、決して形式的な組織ではなく、内住の聖霊による一致を持っているものです。教会は共通の課題と一つの目標を持っているのです。

どのようにしてこのような生き生きとした教会に成長し、どのようにしてパウロが大いなる働きをなすことができたのでしょうか。この疑問に対して、第二章ははっきりとした答えを与えています。

四つの質問について、ちょっと考えたいと思います。

第一番目。第二章に対しては、どのような題名、表題をつけるのでしょうか。

第二番目。パウロ、またパウロの同労者たちの生涯の目標は、いったい何だったのでしょうか。

第三番目。パウロと同労者たちは、どのように働いたのでしょうか。

第四番目。彼らの奉仕の働きは、どのような影響を与えたのでしょうか。

この四つの質問について考えたいと思います。

\*第一番目。第二章に対してはどのような表題をつけることができるでしょうか。

「忠実な主のしもべたちにとって、イエス様のご再臨は、力づけ勇気を与える望みを意味している」ということができるかもしれません。また簡単に言うと、「パウロの祝福に満たされた奉仕」ということも言えるでしょう。さらに簡単に言うと、「むなしくなかった」とつけることができます。一人の人間の生涯について、「むなしくなかった」と言うことができれば、本当に幸いではないでしょうか。

軽井沢にはいくつかの墓地がありますが、その中に次のような言葉が刻まれた墓があります。「我々夫婦は、ともに軽井沢を心から愛す」。結局この言葉は、まだ生きている人々に対して言おうとしたものです。ですから、これはまことにむなしかった人生と言えます。けれども、パウロの奉仕と生涯について考えると、それは決してむなしくなかったと言えます。

この第二章は、二つに分けることができます。

1. 1節から12節までの間に、パウロは自分の働きと同労者について、述べています。

ここでパウロは、何回も何回も何回も、「私たち」「私たち」という言葉を使っています。

1節から読みましょう。

テサロニケ人への手紙・第一 2章1節から12節

兄弟たち。あなたがたが知っているとおりに、私たちがあなたがたのところに行ったことは、むだではありませんでした。ご承知のように、私たちはまずピリピで苦しみに会い、はずかしめを受けたのですが、私たちの神によって、激しい苦闘の中でも大胆に神の福音をあなたがたに語りました。私たちの勧めは、迷いや不純な心から出ているものではなく、だましごとでもありません。私たちは神に認められて福音をゆだねられた者ですから、それにふさわしく、人を喜ばせようとしてではなく、私たちの心をお調べになる神を喜ばせようとして語るのです。ご存じのとおり、私たちは今まで、へつらいのことばを用いたり、むさぼりの口実を設けたりしたことはありません。神がそのことの証人です。また、キリストの使徒たちとして權威を主張することもできたのですが、私たちは、あなたがたからも、ほかの人々からも、人からの名譽を受けようとはしませんでした。それどころか、あなたがたの間で、母がその子どもたちを養い育てるように、優しくふるまいました。このようにあなたがたを思う心から、ただ神の福音だけではなく、私たち自身のいのちまでも、喜んであなたがたに与えたいと思ったのです。なぜなら、あなたがたは私たちの愛する者となったからです。兄弟たち。あなたがたは、私たちの労苦と苦闘を覚えているでしょう。私たちはあなたがたのだれにも負担をかけまいとして、昼も夜も働きながら、神の福音をあなたがたに宣べ伝えました。また、信者であるあなたがたに対して、私たちが敬虔に、正しく、

また責められるところがないようにふるまったことは、あなたがたがあかしし、神もあかししてくださることです。また、ご承知のとおり、私たちは父がその子どもに対してするように、あなたがたひとりひとりに、ご自身の御国と栄光とに召してくださる神にふさわしく歩むように勧めをし、慰めを与え、おごそかに命じました。

何回も何回も、「私たち」「私たち」という言葉が出てきます。

2. 13節から20節を読むと、パウロは、働きの結果や、テサロニケの集会や、迫害する者について語っています。そしてその場合、「私たち」「私たち云々」ではなく、「あなたがた」、或いは「彼ら」という言葉を用いています。13節からです。

テサロニケ人への手紙・第一 2章13節から20節

こういうわけで、私たちとしてもまた、絶えず神に感謝しています。あなたがたは、私たちから神の使信のことばを受けたとき、それを人間のことばとしてではなく、事実どおりに神のことばとして受け入れてくれたからです。この神のことばは、信じているあなたがたのうちに働いているのです。兄弟たち。あなたがたはユダヤの、キリスト・イエスにある神の諸教会にならう者となったのです。彼らがユダヤ人に苦しめられたのと同じように、あなたがたも自分の国の人に苦しめられたのです。ユダヤ人は、主であられるイエスをも、預言者たちをも殺し、また私たちをも追い出し、神に喜ばれず、すべての人の敵となっています。彼らは、私たちが異邦人の救いのために語るのを妨げ、このようにして、いつも自分の罪を満たしています。しかし、御怒りは彼らの上に臨んで窮みに達しました。兄弟たちよ。私たちは、しばらくの間あなたがたから引き離されたので、——といっても、顔を見ないだけで、心においてではありませんが、——なおさらのこと、あなたがたの顔を見たいと切に願っていました。それで私たちは、あなたがたのところに行こうとしました。このパウロは一度ならず二度までも心を決めたのです。しかし、サタンが私たちに妨げました。私たちの主イエスが再び来られるとき、御前で私たちの望み、喜び、誇りの冠となるのはだれでしょう。あなたがたではありませんか。あなたがたこそ私たちの誉れであり、また喜びなのです。

\*第二番目の質問。パウロ、また同労者の生涯の目標とはいったい何だったのでしょうか。

彼らの人生の特徴であり、また大きな影響を及ぼしたものは、まさに「福音」でした。ですから、「福音」という言葉が何回も繰り返して出てきます。

テサロニケ人への手紙・第一 2章2節

ご承知のように、私たちはまずピリピで苦しみに会い、はずかしめを受けたのですが、私たちの神によって、激しい苦闘の中でも大胆に神の福音をあなたがたに語りました。

#### 4 節

私たちは神に認められて福音をゆだねられた者ですから、それにふさわしく、人を喜ばせようとしてではなく、私たちの心をお調べになる神を喜ばせようとして語るのです。

#### 8 節

このようにあなたがたを思う心から、ただ神の福音だけではなく、私たち自身のいのちまでも、喜んであなたがたに与えたいと思ったのです。なぜなら、あなたがたは私たちの愛する者となったからです。

9 節に、もう一度「福音」ということばが出てきます。

#### 9 節

兄弟たち。あなたがたは、私たちの労苦と苦闘を覚えているでしょう。私たちはあなたがたのだれにも負担をかけまいとして、昼も夜も働きながら、神の福音をあなたがたに宣べ伝えました。

福音を通して救うことのできる主の力を体験した者は、福音を委ねられた者です。

これこそあらゆる信者に与えられた最高の使命ではないでしょうか。私たちは罪の世界に住んでいるのです。私たちの周囲は荒れ果てた世に見えます。私たちの周囲にいる人々は、荒野で水を求めている瀕死の人に似ています。私たちはどこに泉があり、どこに救いがあるかを知っています。ですから、私たちは水を求めている瀕死の重病人を泉の所に導いていく責任と義務とを持っているのではないのでしょうか。

集会所の後ろのホワイトボードに、日本の地図が掛けてあります。丹念に見た人がいるかと思うのですが、そのエレミヤ書の箇所が引用されています。

エレミヤ書 8 章 20 節

**「刈り入れ時は過ぎ、夏も終わった。それなのに、私たちは救われない。」**

ということばです。このことばをもとにして、一人の兄弟は次の詩を作ったのです。

恵みの時は終わりに近づいている。広い世界に今や静かに終わりの日が近づいている。遠い裁きの底から不安な叫びが聞こえてくる。私たちの真っ暗な夜には決して光が差し込まない。私たちを照らす神の恵みなくしては、私たちは苦しみと闇の中、暗い道を行かなければならない。永遠に。永遠に。

あなたたちは歌い、喜びに満ちて、「自分は神の子である」と言う。私たちは死のいけにえであり、恐怖に満ち、ひどい苦しみに満ちている。あなたがたはなぜ立ち止まっていて、夜の始まる今、私たちを救おうとしないのか。あなたがたはなぜ、神様がそのひ

とり子を遣わして自分たちを愛していることを教えないのか。あなたがたのおかげで、自分たちはそれを知らずに希望なく滅びゆくのだ。自分たちは死ぬために生まれたものであり、死は永遠から永遠に至る我々の運命なのだろうか。私たちには星が輝かない。約束の光も照らされない。遠くの方にさばきの雷が聞こえる。なぜ、なぜあなたたちは急がないのか。神は、「行って、全世界に十字架の勝利者を宣べ伝えよ」と言っているのに。

あなたたちは、私たちのあわれな心のために喜ばしき知らせを持っている。傷を癒す薬を、苦痛を永遠に癒す薬を持っているのに。なぜそんなに長く沈黙しているのですか。あなたたちの信仰の岩に至る道を示すことばを、私たちに聞かせてください。私たちの涙をぬぐってください。私たちが「死」に向かって進まなければならないのも、あなたがたのせいです。私の罪は私を悩ませ、夜は近づいています。私たちは私のたましいをサタンの力に与えなければならない。永遠に。永遠に。遠くの国々から幾百万という人が、「収穫の主よ、聞きたまえ」と呼んでいる。

私たち信者に新しい恵みを与えてください。私たちの罪を赦してください。待ちこがれているたましいの所へ、十字架のことばを運ぶ者とさせてください。彼らが永遠に滅びないように。

すごい！詩です。福音によってパウロと同労者たちの信仰と確信は弱り果てることなく、反対に力づけられ、水を求めて迷っている人々にいのちの泉、すなわち救いの井戸を力強く宣べ伝えたのです。彼らは、自分自身の思いや自分自身の考えを宣べ伝えたのではありません。ただイエス様だけを宣べ伝えました。自分たちの誉れではなく、主の誉れだけが彼らにとって大切だったのです。

\*第三番目。パウロと同労者がどのように働いたのでしょうか。

このテサロニケ第一の手紙の2章においては、「何々ではなく、何々である」という表現が何回も出てくることに注意したいと思います。例えば、「むだではなかった」。「だましごとでもない」。「人間に喜ばれるためではない」。「へつらいのことばを用いたこともない」云々と。「そうではなく、主に喜ばれるように福音を語るのである」。「自分のいのちまでもあなたがたに与えたいと願った」。

テサロニケ人への手紙・第一 2章8節

このようにあなたがたを思う心から、ただ神の福音だけではなく、私たち自身のいのちまでも、喜んであなたがたに与えたいと思ったのです、なぜなら、あなたがたは私たちの愛する者となったからです。

パウロと同労者の奉仕はどのような性質のものだったのか、という問いに対する答えは、この2章ではっきり与えられています。

八つの事実について書かれています。

1. 1節を読むと、彼らの働きがむだではなく、実りのないものではなかったことがわかります。
2. 2節を読むと、激しい苦闘に関わらず、神に勇気を与えられて、力強く神の福音を語ったことがわかります。
3. 3節を読むと、彼らの宣教が決してだましごとではなく、公明正大なものであったこともわかります。
4. 4節から6節までを読むと、彼らの奉仕の目的が、ただ主の栄光のためであったことがわかります。自分のために、ある団体のために、またある組織のため、自分の力で自分中心に働く者は、本当にあわれむべき信者です。
5. 7節から9節までを読むと、彼らが優しくふるまい、また慕わしく思っていたと記されています。
6. 10節から12節までを読むと、彼らの生活が単なることばではなく、力強い証しであり、彼らの奉仕はこの聖なる清い生活によってなされていたのです。
7. 13節から18節までを読むと、彼らの奉仕の働きは、みことばを生ける主なる神のことばとして受け取ったので、大成功をおさめたことが記されています。
8. 19節から20節を読むとわかります。すなわち、彼らは奉仕をする時に、絶えず主の再臨に視線を合わせ、待ち望む信仰を堅く持っていたということです。

要するに、彼らはちょうど母がその子どもを育てるように、あるいは父がその子に対してするように、信者一人一人に対して力の限りを配慮していたことが、7節と11節を読むとわかります。

テサロニケ人への手紙・第一 2章7節

それどころか、あなたがたの間で、母がその子どもたちを養い育てるように、優しくふるまいました。

11節

また、ご承知のとおり、私たちは父がその子どもに対してするように、あなたがたひとりひとりに、

と記されています。こんにちパウロと同じように、このように奉仕をする者は当時と同じように、豊かな実を結ぶことを体験することができ、そのような奉仕によって初めて生き生きとした教会が生まれます。

また、パウロと同労者の働きによってわかることは、福音の宣教が、いのちをかけるに値するものであるということです。

テサロニケ人への手紙・第一 2章8節

このようにあなたがたを思う心から、ただ神の福音だけではなく、私たち自身のいのちまでも、喜んであなたがたに与えたいと思ったのです、なぜなら、あなたがたは

私たちの愛する者となったからです。

パウロまたパウロの同労者たちの宣べ伝えた「福音の本質」は、主が御国とその栄光とに私たち人間一人一人を召してくださったことです。そのため私たちは、それにふさわしく主のみこころにかなって歩むように導かれているのです。

テサロニケ人への手紙・第一 2章12節

ご自身の御国と栄光とに召してくださる神にふさわしく歩むように勧めをし、慰めを与え、おごそかに命じました。

パウロと同労者の特徴とはいったい何だったのでしょうか。それは、無私無欲の心と、喜んで苦しみを受ける覚悟と、愛に満たされた真心でした。彼らは決して自分自身のことを大切に考えず、絶えず兄弟姉妹がきよめられ、成長することを願ったのです。彼らは、ちょうど親が子どもを育てるように、兄弟姉妹一人一人のために配慮したのです。彼らは、つまづかないように、またいつも主のみそば近くにいるようにと心から願ったのです。

\*第四番目。すなわちパウロとパウロの同労者たちの奉仕の働きは、いったいどのような影響を与えたのでしょうか。

私たちは今までに、「福音」がいつも周囲の者に対して二面的な効果をもたらすということ、つまり、それを受け入れるか拒むかのどちらかであることを見てきました。13節を読むと、テサロニケの兄弟姉妹は「宣べ伝えられた福音」を「神のことば」として受け取ったことがわかります。そしてこれこそ、彼らがパウロと同労者に対して、心から感謝をささげた理由だったのです。

テサロニケ人への手紙・第一 2章13節

こういうわけで、私たちとしてもまた、絶えず神に感謝しています。あなたがたは、私たちから神の使信のことばを受けたとき、それを人間のことばとしてではなく、事実どおりに神のことばとして受け入れてくれたからです。この神のことばは、信じているあなたがたのうちに働いているのです。

14節によると、テサロニケの兄弟姉妹は、主のみことばを受け入れただけでなく、主の諸教会にならう者となり、苦しみや迫害をも喜んで受けたことがわかります。彼らは多くの信者たちと同じように、イエス様の弟子は誤解され迫害されなければならないという事実を、身をもって体験しました。

テサロニケ人への手紙・第一 2章14節

兄弟たち。あなたがたはユダヤの、キリスト・イエスにある神の諸教会にならう者となったのです。彼らがユダヤ人に苦しめられたのと同じように、あなたがたも自分の国の人に苦しめられたのです。



20節を読むと、テサロニケの兄弟姉妹だけでなくパウロ、また同労者たちの誉れであり喜びである、と書かれています。これこそパウロと同労者たちの働きの結果でした。

テサロニケ人への手紙・第一 2章20節

**あなたがたこそ私たちの誉れであり、また喜びなのです。**

同じようにこんにちでも、「みことば」に対して心開き、それを受け入れて信じる者には、永遠のいのちが与えられているのです。私たちの大部分の兄弟姉妹は、自分の罪が赦されており、主との平和を持っているということを体験的に知っているのです。けれど、そのような信者であっても、「あなたこそ実に私の誉れであり、喜びである」と言われる人の数は少ないのではないのでしょうか。いったいどうしてでしょうか。

テサロニケの信者たちは、みことばを受け入れ、激しい苦闘を通して主の諸教会にならう者となりました。彼らの信仰が苦しみや悩みを通して挫折することなく、いっそうしっかりとしたものになったのです。意識的に彼らは、見えるものではなく見えないものを見ていたのです。彼らは日常生活においても、無私無欲の献身的な生活に忠実に従いました。このようなわけで、彼らはパウロと同労者の誉れとなり、喜びとなったのです。

そして、パウロをはじめ同労者たちの伝道活動は、福音の宣教の土台をなしているということ。まさに主のみことばそのものであったことがわかります。「主のみことば」を受け入れるところにはいのちがあり、それを拒むところには憎しみと争いがあります。

テサロニケの兄弟姉妹は、「みことば」をむなしく聞くことはありませんでした。彼らは「みことば」を通して主の声を聞きました。彼らは「みことば」を受け入れて信じ、主との出会いを体験的に知るようになったのです。彼らは「みことば」を通して、主が一人一人に語りかけてくださることを確信していましたので、そのような信仰を持ち続けることができたのです。

けれど、このようなテサロニケの兄弟姉妹とは反対に、大部分のユダヤ人はみことばをむなしく聞くだけにとどまってしまったのです。そのようなユダヤ人たちは多くの預言者たちを殺しただけではなく、イエス様を十字架につけ、さらにパウロをも迫害したのです。

「みことば」をむなしく聞くことは、本当に悲劇的です。

私たちが多くの「みことば」を聞きましたが、それはむなしく終わってしまったのでしょうか。それともむなしくはなかったのでしょうか。

テサロニケ人への手紙・第一 2章13節

**こういうわけで、私たちとしてもまた、絶えず神に感謝しています。あなたがたは、私たちから神の使信のことばを受けたとき、それを人間のことばとしてではなく、事実どおりに神のことばとして受け入れてくれたからです。この神のことばは、信じているあなたがたのうちに働いているのです。**

つまり「主のことば」は働くことを望んでおられ、実際働くことがおできになるのです。その生きた証拠は、まさに生き生きとしたテサロニケの主のからだなる教会でした。

このように、「みことば」が私たちの心のうちに宿り、働くことがおできになるかどうかということは非常に大切です。

最後にもう一箇所読んで終わります。

イザヤ書 66章2節後半

「一主の御告げ。一わたしが目を留める者は、へりくだって心砕かれ、わたしのことばにおののく者だ。」

了